

三國志

卷の十二

三國志

卷の二十

吉川英治著



講談社版

三國志卷之二十

不許複製

共同製本

昭和二十三年七月廿五日 印刷
昭和二十三年七月三十日 發行

定價 百圓

著 者 吉 川 英 治

發行者 東京都文京區音羽町三丁目十九番地
尾 張 眞 之 介

印刷者 東京都文京區久堅町百八番地
大 橋 芳 雄

印刷所 東京都文京區久堅町百八番地
共同印刷株式會社

發行所 東京都文京區音羽町三丁目十九番地
株式會社 大日本雄辯會講談社

日本自由出版協會會員 振替口座電話(33) 代表一三一八六番
東京三九三〇九段

五開多平

三

江月

次

三

白帝

三

圖南の巻

上

三

緑雲大星

三

私情を斬る

三

改聊子元

三

蜀また倣ふ

三

桃園終春

三

雁のみだれ

一四

吳の外交

一五

二獅子兒

一六

冬將軍

一七

慰靈大望

一八

一書生

一九

白帝城

二〇

石兵八陣

二一

孔明を呼ぶ

二二

遺孤を託す……………三六

魚紋……………一四

蜀吳修交……………二六

建艦總力……………二七

淮河の水上戰……………二八

南蠻行……………二八

南方指掌圖……………三〇

孟獲……………三三

輸血路……………三〇

心 縛……………三六

孔明・三擒三放の事……………三五

王風羽扇……………四七

毒 泉……………五九

蠻娘の踊り……………六六

装幀 恩地孝四郎……………七三

挿繪 矢野知道人……………八二

畫馬多手……………八三

私情を斬る

一

漢中王の劉玄徳は、この春、建安二十五年をもつて、ちやうど六十歳になつた。魏の曹操より六ツ年下であつた。

その曹操の死は、早くも成都に聞え、多年の好敵手を失つた玄徳の胸中には、一抹落莫の感なきを得なかつたらう。敵ながら惜むべき巨人と、歴戦の過去を顧みると同時に、

『我もまた人生六十齡』

と、やがては自分の上にも必然來るべきものを期せず居られなかつたに違ひない。

年を老ると氣が短くなる——といふ人間の通有性は、大なり小なりさういふ心理が無自覺に手傳つて來るせぬもあらう。劉玄徳も多聞に洩れず、自身の眼の黒いうちに、吳を征し、魏を亡ぼして、理想の實現を見ようとする氣が、老來いよ／＼急になつてゐた。

折ふしまた魏では、曹丕が王位に即いて、朝廷をないがしろにする風は益々甚しいと聞き、玄

德は或る日、成都の一宮に文武の臣を集めて、大いに魏の不道を鳴らし、また先に亡つた關羽を惜んで、

「まづ吳に向つて、關羽の仇をそぐ、轉じて、駢れる魏を、一撃に討たんと思ふが、汝らの意見は如何に」

と、衆議に計つた。

人々の眼はかゞやいた。いまや蜀の國力も充分に恢復し、兵馬は有事の日に備へて鍛鍊怠りない。それは誰も異存なき意志を示してゐる陣であつた。

ときに塵化が進んで云つた。

「關羽を敵に討たせたのは、味方の劉封、孟達の二人でした。吳に仇を報ふ前に、彼等の御處分を正さなければ、復讐戰の意義が薄れませう」

玄德は大きく領いて、その儀は我も一日も忘れずと云つた。そして直に、劉封、孟達へ召狀を發して處斷せんと言を誓ふと、孔明が側にあつて、

「いや、火急に召狀を發せられては、かならず異變を生じませう。まづ兩名を一郡の太守に轉封し、後、緩々お計り遊ばすがよいかと思ひます」

と、諫めた。叛亂の動機は、つねにさうした彈みから起る。實にもと、人々は孔明の明察に感

心した。

ところが其日の郡臣のなかに彭義といふ者がゐた。彼と孟達とは日頃から非常に親しかつた。會議が終ると、何かそゝくさと急いで下城したやうだつたが、我家へ歸るとすぐ書簡を認めて、(君の命は危い。轉封のお沙汰が届いても、油斷するな。關羽の問題が再燃したのだ)と、密報を出した。

然し、この密書を持つた使の男は、南城門の外で、馬超の部下の夜警兵に捕まつてしまつた。馬超は、手紙の内容を見て、一驚したが、念のため彭義の家を訪れて、彼の容子を見届けることにした。何も感づかない彭義は、

「よく遊びに来てくれた」

と、酒を出して引留め、深更まで快飲したが、そのうちに馬超の口につり込まれて、
「もし上庸の孟達が旗擧げしたら、足下も成都から内應し給へ。不肖、彭義にも、充分勝算はある。足下の如き大丈夫が、いつまで碌々蜀門の番犬に甘んじてをるわけでもあるまいが」
などと慨然、胸底の氣を吐いてしまつた。

馬超は次の日、漢中王にまみえて、彭義の密書とともに前夜のことを悉く告げた。玄德は、直に、彭義の逮捕を命じ、獄へ下して、なほ餘類を拷問にかけて調べた。

彭義は大いに後悔して、獄中から悔悟の書を孔明へ送り、どうか助けくれと、彼の憐愍に訴へた。玄德もその陳情を見て、

「軍師どうするか。」

と半信半疑、心を動かされた風であるが、孔明は冷然と、顔を振つて、

「かゝる愚痴は狂人の言と見ておかねばなりません。叛骨ある者は、一時恩を感じても、後又か

ならず叛骨をあらはしますから。」

と、却つて急に斷を下し、その夜、彭義に死を與へた。

彭義が誅された事に依つて、遠隔の地にある孟達も、さてはと、身に危急を感じ出した。彼に

は元々、離反の心があつたものとみえ、その部下、申耽と申儀の兄弟は、

「魏へ走れば、曹丕が重く用ひてくれるに違ひありません。」

と、主に投降をすゝめ、同じ城にゐる劉封にも告げず、わづか五六十騎を連れて夜中、脱走し

てしまつた。

二

劉封は夜が明けてから孟達の脱走を聞いたが、なほ信じきれない顔して、

「彼の部下はそつくり残つてゐるし昨日も變つた容子はなかつた。狩獵にでも出かけたのだらう」と、左右の臣が、不審な實證をあげても、まさか？ とのみで悠々としてゐた。

すると、國境の柵門から、早打が飛んで來た。約五十騎ほどの將士が關所を破つて魏へ入つたといふ報らせである。さてはと慌てて兵馬を糾合し劉封自身、追手となつて急追したが、時すでに遅しで、空しく歸つて來た。

「何だつて、孟達は、この地位と軍隊をすてて、魏へ入國してしまつたのだらう？」

まだ何も覺らない劉封は、たゞ彼の心事を怪訝るにとどまつてゐたが、やがて成都の急使は、漢中王の命をこゝに傳へて、

「孟達の反心は歴然。なぜ拱手して見てゐるか。直に、上庸、綿竹の兵をあげて、彼の不義を鳴らし、彼の首を討ち取るべし」

と、沙汰した。

これは孔明の深謀で、玄德としては成都の蜀軍を派して、始末するつもりであつたが、孔明はそれを上策でないとして、孟達の追討を劉封に命じれば、その軍に勝つても敗れても劉封は成都へ歸つて來るしかないから、其時に處斷することが、對外策としても最良の方法であると説いたのであつた。

一方、魏へ投降した孟達は、曹丕の前に引かれて、一應、訊問をうけた。曹丕は、内心この有力な大將の投降は歓迎してゐたが、なほ半信半疑を抱いて、

「玄德が特に汝を冷遇してゐたとは思はれんが、一體、何の理由で魏へ來たか」

と質問した。

孟達は、それに答へて、

「關羽の軍が全滅に遭つたとき、麥城へ救ひに行かなかつた點を、舊主玄德は飽くまで責めて熄みません。關羽を見殺しになしたるは孟達なりと、害意を抱いてをらるゝ由を、成都の便りに知つたからです」

ちやうど襄陽方面から急報が入つた。劉封が五萬餘の兵を擁して、國境を侵し、諸所燒拂ひながら進攻して來るといふ注進であつた。曹丕は、孟達を試すには適當な一戦と思つたので、
「襄陽には、わが夏侯尚や徐晃などが籠つてゐるから、決して不安はないが、試みに、足下はまづ同地の味方に加勢して、劉封の首をこれへ持つて來給へ。御邊を如何に待遇するかは、その上で又考へるから」

と取敢ず、散騎常侍、建武將軍に役を任じて、襄陽へ赴かせた。

孟達が襄陽へ着いたとき、劉封の軍勢はすでに郊外八十里まで來てゐた。彼は一通の書簡を認

めて、軍使を仕立てて、

「返辭を求めて来い」

と、劉封の陣へそれを持たせてやつた。

劉封が受けてそれを開いてみると、次のやうな意味が友情的な辭句を借りて書いてあつた。

思フ所アツテ自分ハ魏ノ臣ニナツタ。君モ魏ヘ降ツテ將來ノ富貴ヲ約束シテハ何ウカ。君ト漢中王トハ、養父子ノ間ニナツテ居ルガ、元々、君ハ羅侯氏ノ子デアル。劉氏ノ統ハ既ニ漢中王ノ實子ガ繼グコトニナツテ居ル。君モ足元ノ明ルイウチニ、魏ヘ移ツテ、舊ノ羅侯氏ヲ興ス可キデハナイカ。

劉封は讀み終るとすぐ引裂いて捨てた。

『今日までは未だ彼に些かの友誼をのこしてゐたが、こんな不忠不孝を勧める悪人と分れば却つて思ひ切りがよい』

軍使の首を刎ねて、直に、兵を襄陽城へすゝめた。

だが、劉封の戦ひは、その日も次の日も、敗北を招いた。敵の陣頭にはいつも孟達が現れて、強かに劉封を痛めつけた。

加ふるに襄陽城には魏の勇將として聞えの高い徐晃がゐるし、夏侯尚があるし、到底太刀打

ちにならなかつた。

惨敗をかさねた劉封軍は、敵の三將に包圍されて、殲滅的な打撃にあひ、遂に、上庸へ潰走して來たが、そこもいつの間にか魏軍に占領されてゐるといふやうな惨めな有様であつた。

彼はたうとう百餘騎の殘兵をつれて、成都へ逃げ歸るのほか途がなくなつてしまつた。孔明の先見は中つてゐた。

三

劉封が敗れて歸つて來たと侍臣から聞くと、玄德は、

『堂上へ上げるな。階下に止めておけ』

と、侍者へいひつけ、孔明と顔見合はせて、そつと嘆息した。

彼は重い足を運んで、表の閣へ臨み、階下にひれ伏してゐる養子の劉封をじろと見て云つた。

『賢子。何の面目があつて、こゝへ歸つて來たか』

劉封は、漸く面をあげて、

『叔父（關羽）の危難を救はなかつたのは、まつたく私の意志ではなかつたのです。その折、孟達が頑強に拒んだ爲、つい彼のことばに惹かれ、心にもなく自分も援軍に行かなかつたので』

と、その事を云はれぬ先に辯解し出した。

玄徳は眉を怒らして、

『うるさい。そのやうな言譚を今更聞く耳はもたぬ。そちも定めて、人の喰ふものを喰ひ、人の着る衣を着てゐる人間であらうに、孟達の詭辯に同意し、みす／＼恩ある叔父を見殺しになすとは犬か畜生か、蔑げ果てたやつではある。起てつ、去れつ。見るも穢し』

愈々、烈しく叱つたが、多年育てた子と思へば、私情は又べつと見える。眼に涙をたゝへ、面を横にしたきり、再び階下の子を正視しなかつた。

『……まつたく私の不敏です。いえ、大落度でした。何とぞ此度だけは、おゆるし下さいまし。この通りです』

劉封は涙を流して、何十遍も、額を地にすりつけてゐた。併し、玄徳は横を向いた儘である。自己を木石の如く、私情を仇の如く、凝と抑へてゐた。

そのうちに劉封は、わつと嬰兒のやうに咽び哭いた。その聲には、さすがの玄徳も胸を掻きむしられた。つひに彼の怒れる眉は、慈父の面に變らうとしかけた。

『……………』

すると、それ迄、口をつぐんで玄徳の容子を見てゐた孔明は、眼を以て、彼の崩れかゝる心を